

# 現代中國研究

## 第38号

### 追悼：加藤弘之先生を偲んで

|                   |       |   |
|-------------------|-------|---|
| 加藤弘之氏の早すぎる死を悼む    | 菊池 一隆 | 2 |
| 加藤弘之先生の思い出        | 日野みどり | 4 |
| 加藤弘之先生の晩年と「声」について | 梶谷 懐  | 6 |

### 特集：文化大革命と現代中国研究

|                               |       |    |
|-------------------------------|-------|----|
| 特集にあたって                       |       | 9  |
| 文革50年－文革論から文革研究へ              | 谷川 真一 | 11 |
| 文化大革命研究の回顧と展望                 | 金野 純  | 29 |
| 文化大革命50年；終えるべき文革 終えてはならない文革研究 |       |    |
| －日本における文革研究の今・続編－             | 山本 恒人 | 47 |
| コメント                          | 和田 英男 | 71 |
| 総括                            | 渡辺 直土 | 73 |

### 論文

|                                    |      |     |
|------------------------------------|------|-----|
| 中国の腐敗状況と反腐敗政策に関する一考察               |      |     |
| －中国大陸と香港の比較を通じて－                   | 王 効草 | 78  |
| 中国国内における中国旅行社のネットワーク展開（1923－1949年） | 易 星星 | 103 |

### 書評

|                           |       |     |
|---------------------------|-------|-----|
| 石井知章・緒形康編『中国リベラリズムの政治空間』  | 水羽 信男 | 127 |
| 田中仁・菊池一隆・加藤弘之・日野みどり・岡本隆司著 |       |     |

|                          |       |     |
|--------------------------|-------|-----|
| 『新・図説中国近現代史 日中新時代の見取図』   | 渡辺 直土 | 134 |
| 大里浩秋・孫安石編『近現代中国人日本留学生の諸相 |       |     |
| －「管理」と「交流」を中心に－          | 王 鼎   | 139 |

### 例会報告要旨

|   |  |     |
|---|--|-----|
| 米内山庸夫著「日本対華文化事業論」について（増田喜代三）／1920年代から1970年代に至る台湾観光旅行事業史（吳米淑）／孟京輝の追憶をめぐる考察－中国演劇の「異文化」を視座に（榎原真理子）／日中和解の政治学－「寛容」と「記憶」を中心に（王広濤） |  | 145 |
|---|--|-----|

### 研究会だより

|                                   |  |     |
|-----------------------------------|--|-----|
| 投稿規程／ガイドライン／研究会会則／受贈図書／編集委員会／編集後記 |  | 148 |
|-----------------------------------|--|-----|

中国現代史研究会

(2016. 12. 17)

# **Modern and Contemporary China Studies**

**Vol.38**

## **Contents**

|   |   |     |
|---|---|-----|
| <b>In Memory of the late Emeritus Professor KATO Hiroyuki</b>                               |   |     |
| .....   | KIKUCHI Kazutaka, HINO Midori, KAJITANI Kai | 1   |
| <br>  |   |     |
| <b>Special Issue : The Cultural Revolution and the Significance of Modern China Studies</b> |   |     |
| Prologue .....  |   | 9   |
| The 50th Anniversary of the Cultural Revolution: From Holistic Perspectives to              |   |     |
| Middle-range Researches .....   | TANIGAWA Shinichi                           | 11  |
| Review of the Japanese Research on the Cultural Revolution and Future Prospects             |   |     |
| .....   | KONNO Jun                                   | 29  |
| Fifty Years after the Great Proletarian Cultural Revolution (GPCR): the GPCR that should be |   |     |
| stopped and GPCR research that must not be stopped  |   |     |
| — catching-up on current GPCR studies in Japan .....  | YAMAMOTO Tsuneto                            | 47  |
| Comments .....  | WADA Hideo                                  | 71  |
| Epilogue .....  | WATANABE Naoto                              | 73  |
| <br>  |   |     |
| <b>Articles</b>   |   |     |
| A Study of Corruption and Anti-Corruption in China: Comparing Mainland China and            |   |     |
| Hong Kong .....   | WANG Jincao                                 | 78  |
| The Network-like Development of China Travel Service in Mainland China: 1923- 1949          |   |     |
| .....   | YI Xingxing                                 | 103 |
| <br>  |   |     |
| <b>Book Reviews.....</b>  |   | 127 |
| <br>  |   |     |
| <b>Substance of Report in Monthly Workshop .....</b>  |   | 145 |
| <br>  |   |     |
| <b>News Letter .....</b>  |   | 148 |

# 现代中国研究

第38号

## 目 录

### 追悼：沉痛悼念加藤弘之先生

..... 菊池一隆, 日野绿, 梶谷怀 1

### 专题研究：文化大革命与现代中国研究

序言..... 9

文革五十年：从文革论到文革研究..... 谷川真一 11

日本的文化大革命研究：后顾与前瞻..... 金野纯 29

文化大革命50年：应该终结的文革，不应该终结的文革研究  
—日本文革研究的现状・续编— ..... 山本恒人 47

评论..... 和田英男 71

总括..... 渡边直土 73

### 论 文

关于中国腐败状况及反腐败政策的考察—以中国大陆与香港的比较为例..... 王勁草 78

中国旅行社在中国国内的网络展开（1923-1949年）..... 易星星 103

书 评 ..... 127

例会报告要旨 ..... 145

研究会通信 ..... 148

大里浩秋・孫安石編  
『近現代中国人日本留学生の諸相  
——「管理」と「交流」を中心に——』  
(神奈川大学人文学研究叢書 35, 御茶の水書房 2015年 13,000円)

王 鼎

### はじめに

日中関係史の中で、「留学生研究」はいまや一分野として確立しており、中国留日学生の中から著名な人材が数多く輩出され、関心が高いテーマとなっている。現在、日中関係は政治的に冷え込んでいるが、日本における中国人留学生数は依然として多い。留学という「交流」「教育」の実績がありながら、なぜ政治的には緊張状態が続くのか、留学生交流・教育の意義とは何かを考えるうえで、過去の留学生の歴史を振り返る必要がある。

さて、中国留日学生の歴史は、今から120年前に遡ることができる。1896年に、清朝政府の外交部門である總理各國事務衙門は唐寶鍔ら13人を日本へ初めて留学させ、組織的留学生派遣の歴史が始まった。その後、当時の政策決定過程で重要な役割を果たした湖廣總督の張之洞と、兩江總督の劉坤一は連名で「約束鼓励遊学生章程」、「獎勵遊學卒業生章程」および「自行酌辦立案章程」という留学章程を策定した。こうした法整備により、留日希望者が増大し、1906年前後をピークに、1万人ほどの留学生が日本で学ぶ空前の留学ブームを引き起こした。その中には、陳獨秀、周恩来、董必武、蒋介石、宋教仁、汪兆銘、王国維、陳寅恪、郭沫若、秋瑾、何香凝、田漢など様々な分野で活躍した錚々たる人物が名を連ねていた。

留日学生数の増加につれて、清国留学生に対する日本語教育機関も次々開設された。そのため日本語学校では、教員が足りず専門科目も十分に整わず、教育水準は低かった。この状況を踏まえ、1907年に、東京の清国公使館内に「清国遊学生監督處」が設立され、留学生に対する「教育」及び「管理」が行われた。

本書では、このような中国人留日学生の歴史を「交流」と「管理」の角度から明らかにし、過去に出版された『中国人日本留学史研究の現段階』(2002) と『留学生派遣から見た近代日中関係史』(2009、いずれも御茶の水書房) の不足を補い、今後の研究への問題提起をした。

## 本書の構成と概要

本書は、この分野の研究の第一人者である大里浩秋・孫安石の編集によるもので、既に上梓された前作二書の続編ということができる。留学生史研究についての第3冊目となる本書は、清末から日中戦争、国共内戦時期に至るまでの中国人留学生の行動および、日中双方の政府の対応、そして両国における相互留学の比較研究等について様々な角度から考察された14篇の論文と資料編で構成されている。

従来の留学生史研究は清末に重点が置かれていたが、それ以降の北洋政府・南京国民政府時代、とりわけ日中戦争期、さらに戦後期はあまり光が当てられることはなかった。本書は、未開拓であったそれらの分野にも踏み込み、留学生による革命や抗日運動への参加の歴史だけでなく、教育内容や生活環境、帰国後の動向なども検討している。従来の研究は、その多くが中国人日本留学生に限定されていたが、本書では当時の日本の知識人・官僚・軍人等の中国留学経験者も研究対象に含め、日中の留学生を総合的に考察し、研究を一步前進させた。

以下、本書の構成について目次にしたがって見ていく。

まえがき（大里浩秋）

### I 日中関係の開始——留学生の「管理」

大里浩秋「東亜同文会機関誌に見る明治期日中留学交流史」

胡穎「清末留日学生の留学経費について—公費生を中心」

李曉東「『軍國民』考」

周一川「近代中国人留学生統計資料に関する考察—民国期を中心に」

孫安石「中華民国留日学生監督處の研究—1930年代を中心に」

田中剛「『蒙疆政権』留学生の戦後—東北・北海道を中心に」

王雪萍「救済・召還をめぐる国府の中国人留日学生政策の迷走—中華民国外交部・教育部档案をてがかりに」

### II 日中関係の多様性——留学生の「交流」

易恵莉（大里浩秋訳）「秋瑾の日本留学及び服部繁子と実践女学校」

劉建雲「第一高等学校特設予科時代の郭沫若—『五校特約』下の東京留学生活」

中村みどり「陶晶孫の日本留学と医学への道—陶烈、佐藤みさとの交流から」

譚皓（孫安石訳）「倉石武四郎の中国留学初論」

木山英雄「今村与志雄『橋川時雄の詩文と追憶』（汲古書院刊）を読む（上）（下）」

尾高曉子「音楽学校の中国人留学生—東京音楽学校を中心として」

見城悌治「近代日本におけるデザイン専攻中国留学生の動向と帰国後の活動」

### III 資料編

川崎真美「敗戦前後の中国人留学生受け入れ関連資料」

王雪萍・田沼彬文「『中国留日学生報』記事目録」

## あとがき（孫安石）

まず第一部：日中関係の開始—留学生の「管理」の論文をみていこう。

大里論文は、1898年から1911年までに東亜同文会によって発行された『東亜時論』(1898.12～1899.12),『東亜同文会報告』(1899.12～1910.6),『支那調査報告書』(1910.7～1911.12)という三つの機関誌に記載された日中双方の留学生に関する各項目のうち、重要な記事を抽出し、内容について記事をまとめたものである。これらの資料は当時の日本側が受け入れる留学についての準備や考え方の一端を示すもので、留学実態を断片的ながら多角的に見出すことができる。

胡論文は、留学経費の視点から、州や県の地方財政から給費をうけた「公費生」の存在を提示し、その留学生活状況を、「官費生」や「自費生」と比較し、従来中央政府給費で留学した「官費生」と同一視され、分析の対象とならなかった公費生の多様なあり方を考察した。今後、この研究の延長線上にある中華民国期の公費生についての研究も期待できよう。

李論文は、留学生を通じ清末・民国初期の社会に影響を与えた「軍国民」思想の原点について、梁啓超の弟子・蔡鍔と蔣方震の『軍国民篇』と『軍国民之教育』を挙げ、この間留日学生は、徳富蘇峰の民友社が出版した『武備教育』および尾崎行雄の『尚武論』『対支那処分案』に共感し、それを本国に伝え、これらが相乗して清末のナショナリズム運動に影響を与えたことを考察する。

周論文は、清国公使館に設置された「留学生監督処」が発行した『官報』、日本の文部省・警視庁・日華学会・興亜院など各種機関による目的別の留日学生の統計データを検証し、当時の記録の遺漏や誤記を指摘している。しかし、遺漏か誤記は細部の箇所に留まり大筋で本稿により、民国時期における中国人留学生の概数がほぼ明らかになり、留学史研究者にとって大いに参考に値するものであろう。

孫論文は、清末から1937年の盧溝橋事件で閉鎖されるまでの留日学生監督処について、(1) 1910年代の設立と初期の活動、(2) 1920年代の運営経費、(3) 1927年の南京国民政府成立以降における管理強化の動き、(4) 閉鎖に至るまでの経緯、を明らかにした。今後もこれらの膨大な資料はさらに詳細に検討がなされるべきであろう。

田中論文は、日本の傀儡政権であった「蒙疆政権」(主席はモンゴル王公徳王)が派遣留日学生の、1945年以降の状況を明らかにしたものである。戦争末期における留学日学生に対して帰国させようと促したが、残留した人は地方に疎開させられる。従来の研究では、それらの留学生を対象としての実態研究は、東京・大阪・横浜などの大都市について集中的に行われ、地方都市の留学生について重視されなかった。ここで、本研究では、今まで取り上げられなかった東北・北海道の地方都市の実態にも光を当てている。

王論文は、戦後の国民政府の外交部・教育部の資料を用い、国民政府が留日学生に対して実施した救済・召還政策を分析し、それに対する留日学生の反応と、なぜ国民政府に対する失望の念が募り、結果として中国共産党側に引き寄せられたかについて検証し、その

原因を、留日学生救済金をめぐる駐日代表団の失策と腐敗であると指摘した。

つぎに第二部：日中関係の多様性—留学生の「交流」に収録されている論文をみていく。

易論文は、清末の女性革命家・「鑑湖女侠」と呼ばれた秋瑾の前後二回にわたる日本留学、実践女学校への入学と退学の経緯、当時京師大学堂教習を担当していた服部宇之吉の夫人服部繁子との関係を論じたものである。

劉論文は、郭沫若が残した家族への書信および『第一高等学校六十年史』などの資料を手がかりとして、郭沫若の留日経緯を紹介しながら、一高特設予科を受験する当時の生活実態を考察した。また、辛亥革命後、北洋政府が承認した「五校特約」による留学の具体的な事例を示している。

中村論文は、作家で医学者である陶晶孫の医学への志や理想を、同じく医学を志ながら早逝した弟・陶烈への追悼の文集や陶烈の遺稿集、妻・佐藤みさを（陶晶孫の伴侣）の母校の同窓会誌等を用いて明らかにしている。

譚論文は、倉石武四郎が文部省在外研究員として2年半（1928.3～1930.8）にわたり、北京に滞在したときの『述学齋日記』と『在外研究始末書』という留学報告書を分析し、倉石の漢籍調査・中国各地への旅行記・知識人（魯迅、胡適、陳寅恪、章炳麟）との交流を中心に留学生活の様子を明らかにした。虚心坦懐に中国文化を知ることを追求した倉石の中国観・戦争観を浮彫りにしたことによって、今後より詳しい彼の人間像の解明が期待される。

木山論文は、1918年から戦後まで長期間にわたり中国に滞在した日本人記者であり、中国文学者の橋川時雄の生涯と詩文について考察した『橋川時雄の詩文と追憶』の書評である。30年以上中国に滞在し、多くの中国人知識人と交友し、日中両国学術・文化交流史の証人とも言える橋川時雄の留学生活の軌跡を明らかにした。

尾高論文は、1902年から1945年まで東京音楽学校、私立音楽学校等の音楽科に在籍していた中国人留学生の生い立ちや帰国後の状況を詳しく紹介し、東京音楽学校在籍者の7割近くの人物特定を行っている。また、留学経験者を通じ、中国の音楽教育制度がいかに整備され、音楽界にどのような影響を与えたのかを考察する。

見城論文は、東京美術学校（1896～1952）、東京工業学校（1899～1914）、京都高等工芸学校「图案科」（1902～1952）、東京高等工芸学校（1922～1952）の4校の官立高等教育機関を対象とし、美術と工業、建築分野に関わる「图案科」「工業图案科」「工芸图案科」専攻の留学生に焦点を当て、彼らがこの分野で具体的に何を学び、帰国後どのように活かそうとしたのか、同時代の日中両社会の特色に照らして分析する。

第三部の資料編は、主に戦後の中国人留学生研究に資する有用な資料を集めたものである。「敗戦前後の中国人留学生受け入れ関連資料」は、中華民国留学生補導総本部と日華協会主事を兼務した石田一郎氏が所蔵していた「興亜院」、「大東亜省」、「日華協会」に関する一連の史料を整理し、解題を付して掲載している。この資料により、敗戦前後の中国人留学生を受け入れた日本側の実態の一端をみることができ、新しい知見を与えたもの

といえる。『中国留日学生報』記事目録は、1946年5月22日に成立した中華民国留日同学総会の機関誌であった『中国留日学生報』の1947年3月（第3号）から57年7月（第116号）までの記事目録である。いずれも、従来、本格的な研究がなされてこなかった戦後の留学生や華僑の動向を分析する上で欠かすことのできない資料であり、本研究分野に裨益するものである。

## 本書の意義と特徴

以上、本書の概要についてみてきた。先に同じ編者により公刊された二書と較べ、執筆者が増え、内容が多岐にわたっており、テーマがより細かく深くなり、未解明の事実がさらに明らかになった。以下では、本書の意義と特徴について検討していく。

第一に、本書は、前二書で検討されなかつた戦後の留学生の状況についても検討され、長期的な視野から中国留日学生の実態を明らかにしている。留学生統計データの検証や個別専門分野の解明など、研究史上空白であった部分に光が当てられたことは、本書の意義といえよう。

第二に、これまで留学生史が個人の経歴やその後の足跡についての研究に重点がおかれていたのに比べ、本書では日中両国政府が留学生をいかに「管理」し、その動向に注意を払っていたかという問題意識を持つ点で新しいといえる。

本書の意義を踏まえた上で、本書に残された課題を、筆者の問題意識に沿って、若干指摘したい。本書では、上に述べたように、これまで触れられなかつた多岐にわたる日中留学生史の諸側面について取り上げられているが、多くの研究者による個別論文で構成されているため、各論文執筆者の関心がそれぞれ異なる印象をうけた。また、『近現代中国人日本留学生の諸相』というタイトルがつけられているものの、譚論文と木山論文が倉石武四郎、橋川時雄の中国留学についてそれぞれ考察しているほか、李論文も日中文化思想論、戦争理念などを中心的に論じているなど、必ずしも中国人日本留学生に関する論考ばかりが収録されているわけではない。もちろん、本書は統一的な見解を目指したものではないため、筆者の問題提起はいささか的外れかもしれないが、今後さらに、執筆者の関心に沿つたそれぞれの分野について、より考察が深められていくことが期待される。

また、中国留日学生史研究においては、清末に関する研究が最も盛んで、実藤恵秀、黄福慶、阿部洋、李喜所らにより数多くの成果が蓄積してきた。一方、それ以降の、1930年代から1980年代にいたるまでの日中留学生史の交流の全体像はまだ未解明の分野が多く、特に第二次大戦後が終了した直後の1945年から1949年まで、および中国の国共内戦期の留学生史の動きなどについては、残された課題は少なくない。本書の孫安石、田中剛、王雪萍、見城悌治の論文は、まさにこの分野に焦点を当てたものである。さらに、1949年の中華人民共和国成立後から改革開放前後の留学生動向についての研究も、政治的な理由であまり進められていない。日中関係の現代史を留学生交流という視点からとらえなおす作業はまだ緒についたばかりといえるが、たとえば、「文化大革命」による日中関係の

断絶と、「日中国交正常化」による日中関係を、留学生交流という観点から検討することも喫緊の一課題であるといえよう。

いずれにせよ、本書は、いわゆる「瑕不掩瑜」（「瑕」は玉お斑点のこと、「瑜」は玉の光沢）という四字熟語のように、少し足りない部分はあるが、これまでの空白を埋めるべく、様々な資料をもとに、各々の筆者の独自の視点から、中国人留日学生史をつまびらかにしようという試みであり、留学生史研究の最新の研究成果を集めたものといえる。中国人日本留学生史に興味がある読者諸兄にはぜひ一読にしていただきたい必携の書であることを記しここまで断簡零墨、とりあえず擱筆する。

(おう てい・新潟大学現代社会文化研究科博士後期課程1年)

(御茶の水書房 2015年 13,000円+税、642頁)

# 現代中國研究

(第38号)

2016年12月17日

中国現代史研究会  
(理事長: 菊池一隆)

中国現代史研究会ホームページ <http://modernchina.rwx.jp/>

事務局: 〒640-8510 和歌山市栄谷930  
和歌山大学 教育学部 三品英憲 研究室

印刷: 交友印刷㈱  
郵便振替口座: 00980-4-22508 中国現代史研究会  
銀行口座: りそな銀行 新金岡支店 普通 6821485 中国現代史研究会  
定価: 1500円(税込)

\*表紙題字: 池田 誠